

武蔵野大学生、新図書館を考えるプレゼン



建設への機運が高まってきた町の新図書館構想について、武蔵野大学（東京）小峯ゼミの学生が、学生独自の視点から建設構想の提案を考え、2月7日役場でプレゼンテーションしました。

発表は瀧音洲ティエゴさん（環境学科都市環境専攻3年）、畝本翔さん（政治経済学科同）、早出恵理花さん（日本文学文化学科同）の3人。基本機能を①蔵書図書貸借の場②学習の場③コミュニケーションの場④情報発信の場ととらえ、貸し出し機能では、こども向け図書、専門書、漫画CD、DVDなど蔵書の充実、インターネット検索の充実、司書の充実、

開館時間の延長、全国図書館ネットワークとの接続を提案。学習の場として個別ブース、パソコンの充実、視聴覚室設置、ディスプレイルームの必要性を挙げました。コミュニケーション機能は、企業化支援と連動したカフェ募集と飲食コーナー、カルチャースクール、写真など展示スペース、留学生との交流の場、情報発信機能では町民のリクエストや疑問などに答えるコンシェルジュ機能の整備など、町独自のブランド戦略を加える提案を提示しました。同大は昨年から役場で学生の就職前職場体験、ゼミナール合宿などで来町町との接点が生まれています。

キャンパス「D&DEPARTMENT」の選手が競う

2月11日、キトウシ森林公園キャンパススキービレッジで第10回キャンパスAGSL大会（大回転）が開かれました（本町関係分の大会成績は16、17位）。全長885・4メートル、最大斜度23・74度、平均斜度14・25度（小学2年生以上コース）。今年から緩斜

1月31日、農村環境改善センターで「ロングライフデザインの視点で東川町らしさを考える」と題してデザイン活動家 ナガオカケンメイ氏（本名長岡賢明）の講演会を開きました。北海道経産局が地域ブランド構築支援事業として開きました。伝統工芸、地場産品をカギユアルで紹介する「NIPPON VISION」を中核コンセプトに、おしゃれにもつくり手に触れやすい場「D&DEPARTMENT」を国内8カ所と韓国ソウルに展開。47都道府県その県らしさを毎年集



めて47のものを繋げるフロア『デザインの道の駅』を目指しています。日本らしさをデザイン感覚で紹介していく雑誌『デザイントラベル』も年1回発行しています。「ポイントはその土地らしいこと、その土地の人がやっていること、その土地らしいメッセージを持つこと、利用価値が手ごろなこと」「見て、会って、交流して感じてもらうこと」「『らしさ』を整理しよう」とブランドづくりのヒントを話しました。

面を延長してコース距離が延びました。午前10時、競技開始時の気温は氷点下6・1度。早朝から良く冷えて晴れ間が広がり、雪質最高のコンディション。エントリー選手は、昨年より36人増え、過去最高の242人。ちびっ子選手は家族の声援を受けて力いっぱい滑走を見せました。お母さん、お父さん



小6男子9位の杉本怜偉君（第5旗門）

酒造度、ひがしかわワイン、先行予約始まる

東川産ぶどう100%原料の赤ワイン「ひがしかわワイン2014」（仮称）が今秋、いよいよ新登場します。町では町民ひがしかわ株主の皆さんにいち早く新酒を味わってもらおうと、限定先行予約の受け付けを始めました。希望者は道の駅・道草館東川振興公社で予約可能です。



東川振興公社職員がぶどうの仕込み作業をしました＝昨年10月、10R（トアール）農場ぶどう酒醸造所で

「おいしいワインはおいしいぶどう作りから」と栽培に定評があるナカザワワインヤード経営（ぶどう農場）、中澤一行さん（48）＝岩見沢市＝の栽培指導を受け、10R（トアール）の経営者で、国内で評価が高いワイン醸造家、ブルース・ガットラブさん（52）＝同＝に醸造委託しています。それが前評判を高め、ひそかに各地の酒販店から注目され始めているよう。早くも販売取り扱い希望の打診が入り始めました。

ひがしかわ株主用ととも600本ずつの限定で、残りは町内のホテル、旅館、酒類販売店などに卸し販売の予定。第三セクター会社の（株）東川振興公社（山森敏晴会長）が、酒類販売に加え、酒類卸売業免許を取得して特産ワインの卸し販売も担います。町内2カ所のぶどう畑では、セイベール種に加えて、昨春からピノノアール種（赤）、シャルドネ種（白）など4品種も試験栽培を始めています。

東小同窓生の最長者同期会、今もなごり

1902（明治31）年の開校以来、今年112年目を迎える東川小学校の同窓生の中で、最長老の同期会「イネの会」が今も元氣な同期会を開いています。1935（昭和10）年と翌36（同11）年に東川尋常高等小学校（当時）を卒業した同窓生が集まっている



会。「イネ」とは、亥（い）年と子（ね）年生まれの子孫が集まる会という意味。故中川音治元町長、農民彫刻家として活躍した故松田与一氏らも同期生だったそうです。15年ほど前から集まるようになったとい

クロスカントリースキーで健康への講習会

2月11日、キトウシ森林公園で町教委が主催して初の「大人のクロスカントリースキー講座」を開きました。講師は長野、ソルトレーク両五輪でクロスカントリースキー日本代表選手だった古澤緑さん（SAJ公認クロスカントリースキー指導員、ニッセンスポーツ）。20人が参加し、膝に負担が少なく運動効果の高いクロスカントリースキーの楽しさを満喫しました。親子から60代まで年齢はさまざま。



旭川市内からも参加し、好天の雪上にトレースを描きました。「興味を持ってはいたものの初めて」などと比較的初心者が多く、ボールの出し方、前に交互にスキーを滑らせて進む滑走法（クラシカル）の基礎技術を学びました。みんなすぐにスムーズな滑り方のコツをつかみ、「今まで自己流で滑っていた基礎が学べて勉強になった」「すごく楽しかった」と心地よい汗を流しました。

今も達者な町内最長老クラスの皆さんは、寺林信夫さん（南町1）、御家瀬重信さん（17区）、横暮作一さん（18区）、佐藤正次郎さん（23区）＝写真左から＝。「最盛期には30人くらいはいたかなあ」という会ですが、今出席しているのは4人。2カ月に一度の間隔で集まって料理を囲み、活躍した当時の思い出話などに花を咲かせています。